

要介護高齢者の在宅ケアに関わる家族介護者の意識調査

森口靖子*, 古城幸子**, 逸見英枝**, 塚本千恵子**,
野口純子*, 竹内美由紀*, 中添和代*

*香川県立医療短期大学看護学科, **新見公立短期大学看護学科

Consciousness Investigation of Home Caregivers Who Related to Disabled Elderly

Moriguchi Yasuko*, Kojo Sachiko**, Henmi Fusae**, Tukamoto Chieko**,
Noguchi Junko*, Takeuchi Miyuki* and Nakazoe Kazuyo*

Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Abstract

An investigation was attempted on seven persons of actively working home caregiver in order to elucidate their consciousness about care. It revealed all of them were caring with keeping safety, comfort and dignity of the clients, which were important points of care. Six persons had the feeling of satisfaction to the care, but one was burdened with the care, because she was suffering from fatigue and interference of her daily life.

However, disabled elderly needed not only physical care such as cleanness of the skin, bathing and changing clothes in daily life, but also support for their worthy life.

Key Words : 家族介護者の意識 (Home caregivers consciousness),
家族介護者の思い (Home caregivers considers),
在宅ケア (Home care), 主観的幸福感 (Quality of life)

*連絡先 : 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護科

*Corresponding address : Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0123, Japan

はじめに

近年、高齢社会や疾病構造の変化から長期慢性疾患患者や障害をもったままで在宅で生活する患者が増加し、在宅ケアのニーズが高まっている。一方、家族介護者^{註1}の高齢化や核家族化で家族の介護能力が低下しているのが現状である。ましてや長期にわたり在宅療養を余儀なくされる疾病や障害をもつ人とともに生活する家族介護者は身体的・精神的・社会的に影響を受ける¹⁾。そこで今回、過去の訪問看護実習で関わったケースで在宅ケアの終了した家族介護者に在宅ケアへの意識^{註2}や思い^{註3}について聞き取り調査を行った。その結果を心理的面、社会的面について分析し、在宅ケア促進の一助にすることを目的とする。

方 法

1. 対象

1993～1998年に訪問看護実習を行った岡山県N市周辺の要介護高齢者の家族介護者で調査に協力の得られた7人。

2. 調査方法

家族介護者7人を訪問して、筆者が作成した質問用紙を用いて、自由回答で聞き取り調査を実施した。調査期間は1998年12月の1週間である。平均して1家族介護者に要した時間は2時間程度である。

3. 質問紙の内容

属性：年齢、性別、要介護高齢者との続柄、職業の有無、介護期間

心理的面：介護時の気持、現在の気持、介護時に困ったこと、介護時に嬉しかったこと、介護して良かったと思うこと

社会的面：社会に望むこと、自分の人生に支障はなかったか、家族関係の変化はどうか、地域からの支援の有無、社会資源の活用

展望：今後在宅ケアをどう思うか

4. 要介護高齢者の状態の関連性については、訪問看護実習のものを使用した。調査時には全員死亡

され、在宅ケアは終了していた。

5. 分析方法

聞き取り調査のデータ（自由回答および自発的な話）を属性、心理的面、社会的面、展望に内容分析して細目の意味内容を検討した。

結 果

1. 介護者の背景

家族介護者の年齢区分は、50～59歳が2人、60～69歳が2人、70～79歳が1人、80歳～89歳が2人で平均年齢は68歳であった。家族介護者の性別は、女性が5人、男性が2人で、要介護高齢者と家族介護者の続柄は、息子の嫁が3人、配偶者が3人、娘が1人であった。介護期間は5年未満が1人、5年から10年が6人で、平均7.6年であった（表1）。

要介護高齢者の概要としては、主疾患は脳血管障害後遺症4人、パーキンソン病2人、リュウマチ1人であった。そのうち、痴呆を有する者は4人であった。死亡時の年齢は77歳～92歳で平均は83歳であった。そして寝たきり度^{註4}はBランクが3人でCランクが4人であった（表1）。

2. 心理的面について（表2）

介護時の気持は、義務、当たり前のこと、家庭医のおかげで、痛くないように、知識が必要、悔いのないように、指示され気を遣った、腹立たしい等であった。

現在の気持は、役目を終えた、良い体験だった、思い出が残った、自分は這ってでも頑張る、悔いはない、気が長くなった、10年とと思っていたので、女性のありがたみがわかった等であった。

介護時に困ったことは、入浴介助、体動時の困難、衣服の着脱、身体の苦痛、風呂の改善を迫られた、言語不明瞭等であった。

介護して嬉しかったことは、清潔になった、楽しくしてくれた、家で介護できた、気付かされた、診療所のケア・ホームヘルパーが助けてくれた等であった。

介護して良かったと思うことは、本人がその人らしく生きられた、家族が一丸で頑張れた、子供

註1 家族介護者：家族の中で主に要介護高齢者の介護にあたった者

註2 在宅ケアの意識：人が以前から常に認識している精神状態

註3 在宅ケアの思い：人が介護の体験から感じた精神状態

註4 寝たきり度：厚生省判定基準ランクより²⁾

J（自立）、A（準寝たきり）、B（寝たきり1・ベッド上に座る）、C（寝たきり2）

表1 要介護高齢者及び家族介護者の概要

ケース	A	B	C	D	E	F	G	
要介護 高齢者	死亡時の年齢	92歳	83歳	82歳	92歳	78歳	81歳	77歳
	性別	女	男	女	男	女	女	女
	疾患名	リウマチ	脳梗塞	脳梗塞	脳軟化症	脳卒中	パーキンソン病	パーキンソン病
	寝たきり度	C	B	C	B	C	B	C
	言語障害	有	無	有	無	有	無	有
	運動麻痺	四肢麻痺	左片麻痺	四肢麻痺	下半身麻痺	右片麻痺	なし	下半身麻痺
	痴呆	有	無	有	無	有	無	有
家族介護者	家族	本人・娘・娘の夫・孫夫婦	本人・妻・息子の嫁	本人・息子の嫁・息子の嫁・娘・孫夫婦・ひ孫	本人・息子の嫁・息子の嫁・孫	本人・夫・娘	本人・息子の嫁	本人・夫・娘（養女）
	家族間での役割	無	戸主	無	無	無	無	無
	認識と受容	不明	もうこれでよい	不明	介護してくれるので在宅でおれる	不明	私はもうダメです	不明
家族介護者	介護終了時の年齢	60歳	79歳	63歳	53歳	82歳	55歳	85歳
	性別	女	女	女	女	男	女	男
	続柄	娘	妻	息子の嫁	息子の嫁	夫	息子の嫁	夫
	職業	介護専属	介護専属	農業兼	自営店	農業兼	離職・農業兼	介護専属
	介護期間	9年	3.5年	7年	8年	10年	6年	10年

表2 家族介護者の意識、思い [心理的面]

介護時の気持	現在の気持	介護時困ったこと	介護時嬉しかったこと	介護して良かったこと
義務・当たり前のこと 3人	役目を終えた 3人	入浴介助 7人	清潔 7人	本人がその人らしく 3人
家庭医のおかげ 3人	良い体験だった 2人	体動時の困難 3人	楽しくしてくれた 3人	家族一丸で頑張った 3人
痛くないように 1人	思い出が残った 2人	衣服の着脱 2人	在宅介護ができた 3人	子供に生き方を伝えた 2人
知識が必要 1人	自分は頑張らねば 1人	身体の苦痛 2人	気付きがあった 3人	
悔いがないように 1人	悔いはない 1人	言語がわからない 2人	診療所のケア 2人	
指示され気遣いし 1人	気が長くなった 1人	風呂の改善の要請 1人	ホームヘルプ 1人	
腹立たしかった 1人	10年と思っていたので 1人			
	女性のありがたみ 1人			

表3 家族介護者の意識、思い [社会的面]

社会へ望むこと	人生の支障の有無	家族関係の変化	地域支援の有無
ホームヘルパー 2人	外出できない 4人	仲良くなった 3人	家内のことなので… 5人
社会資源 2人	通所サービスの付添い 1人	夫婦の助け合い 2人	
訪問看護実習 2人	離職 1人	兄弟・姉妹の助け合い 2人	
社会福祉 2人	自営もできた 1人	主人が優しくなった 1人	
		養女が頼りだった 1人	

達に生き方を教えることができた等であった。

3. 社会的面について (表3)

社会に望むことは、ホームヘルパーは必須、社会資源、訪問看護実習、社会福祉等であった。

自分の人生に支障はなかったかは、全く外出できない、入浴サービスにも付き添いがある、やむなく離職した、自営もしながら等であった。

家族関係の変化は、家族が仲良くなった、夫婦

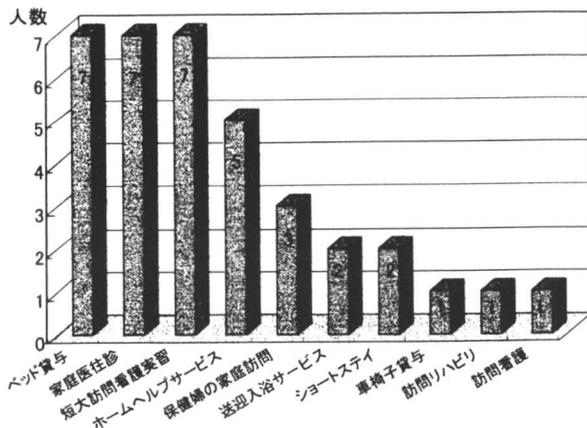


図1 社会資源の活用

表4 家族介護者の意識、思い〔展望〕

今後在宅ケアをどう思いますか	
家で見てもらいたい	3人
病院か老人ホームに入る	3人
在宅は無理かなあ	1人

が助け合った、兄弟・姉妹が助け合った、主人が優しくなった、養女を頼りにした等であった。

地域支援の有無は、自分の家内事で近所には言わないであった。

社会資源活用は、ベッド貸与、家庭医往診、短大訪問看護実習、ホームヘルプサービス、保健婦家庭訪問、送迎入浴サービス、ショートステイ、車椅子貸与、訪問リハビリ、訪問看護等であった(図1)。

4. 展望

今後在宅ケアをどう思いますかは、自分も家で見てもらいたい、病院か老人ホームに入る、在宅は無理かなあ等であった(表4)。

考 察

在宅ケアは家族介護者の存在なくしては十分な援助は困難であり、また在宅ケアは24時間継続するものである。今回調査の家族介護者の背景は、家族介護・老老介護^{註5}の典型と言える状況で、在宅ケアを終了させた人達である。

その在宅ケアを終了した家族介護者の心理的側面は、「義務として、当たり前のこととして」と回答しているように、古くからの「いえ」を中心とする

家族制度からの高齢者の扶養という義務感から介護したことが伺える。そして、その介護は安全・安楽に、また、できるだけ完璧にという意識があるが、思いとして身体疲労や義務・役目という負担感を現実問題として感じている。「役目を終えてホッとした」、「良い体験だった」等の達成感や安堵感が伺える反面、今後のこととして、「自分は絶対に他に迷惑はかけられない」という強い意思もあり、介護することの大変さを象徴していると考えられるが、介護して嬉しかったこととして、要介護高齢者が「その人らしく生きられた」、「家族関係が良くなった」等在宅ケアの長所も評価できている。

介護者が最も困難に感じているニーズは入浴介護、衣服の着脱、体動時の負担等、日常生活援助の中でも特に、体力や知識や技術を要するケアに集中している。従って要介護高齢者の介護サービスとして身体介護を中心とした支援が不可欠であることがわかる。今回の調査結果からも社会に望むこととして、ホームヘルパーの存在は必須であることが特に高齢の男性介護者から聞き取れた。

次に社会的側面では、介護者自身の生活のあり方について、全く外出できない、要介護高齢者から離れられないという社会的制約の現実がある。緒方³⁾は介護者の負担度調査の中で、「家族介護者の健康状態不良や社会的制約が増すことが家族介護者の不愉快さを増す」。そこで「社会的制約を取り除くことが現状の問題を改善する最善策である」と述べている。社会的制約とは家族介護者自身の時間が十分持てないこと、家族間に緊張をもたらすこと、家族介護者自身の日課がめっちゃくちゃになること、友人を家に招待できない等の要素がある。緒方³⁾の調査結果からも「外出がままならなかったり、全く自由がきかないと訴え、社会的制約のある家族介護者は46%に及ぶ」とあるが、本調査でも同様の結果であり、1人はやむなく離職している。在宅ケアは家族介護者自身の生活も身体的・精神的・社会的に充足されなければならない。2000年4月からの介護保険制度では社会的ケアを打ち出しているが、基本的にはケアの中心は家族であることが本調査からも伺い知ることができた。そのような中、介護認定は要介護高齢者の病状や日常生活の不自由度で査定され要介護度が決定している。白澤⁴⁾はケアマネジメント過程での問題点として、「ケアマネジメントでは要介護高齢者やその家族のニーズに対応するため、家

註5 老老介護：65歳以上の要介護高齢者を65歳以上の家族介護者が介護する状態を言う

族の介護力によって、給付されるサービス水準が異なったケアプランになって当然である。すなわち、家族の介護力に関係なく、本人の状態だけで給付水準が決定する保険の原則と、個別に対応するケアマネジメントをいかにすり合わせるかの課題である」と述べている。本調査でもそれぞれの家族介護者は年齢・性別・介護力・家族関係等さまざまであり、今後家族介護者の状況を配慮して検討すべき課題であると考えられる。地域支援に対しては、まだまだ閉鎖的意識が存在している。在宅ケアは要介護高齢者と家族のよりよい生活を目標とした生活の再構築である。家族を基盤として社会資源を提供することや、地域の共同支援体制の充実が望まれる。種々の社会資源サービスについては、介護保険制度前の調査であったことで限界があり、デイケアの利用は皆無であった。そして今後の展望としては、家族介護者が自分の老後を在宅で見てもらいたい、または施設に入るが半々であった。これは在宅ケアを終了した家族介護者の思いの中にさまざまな影響があったと推測できる。

N短大の訪問看護実習では、要介護高齢者や家族介護者の気持を和らげる効果があった。要介護高齢者や家族介護者は身体介護のみならず、仲間や生きがいへの支援を求めていることが分かった。つまり在宅ケアとは要介護高齢者や家族介護者にとって、主観的幸福感を満たしていくことであろう。

結 論

在宅ケアにおける家族介護者の意識と思いを理解するために家族介護者7人に聞き取り調査を実施し、検討した。

1. 家族介護者は要介護高齢者を安全・安楽に、またできるだけ完璧に介護する意識が伺えた。その結果、達成感の得られた人、逆に負担感の残った

人があり、要因として社会的制約、高齢等が考えられた。

2. 家族介護者の介護ニーズは入浴介護、衣服の着脱等の身体ケアに集中していた。
3. 家族介護者は介護体験から家族関係の再構築、人間的優しさ、その人らしさの発見等多くの意味を得ていた。
4. 家族介護者は身体的ケアのみならず、仲間や生きがいへの支援を望んでいた。

謝 辞

本調査にご協力下さいました7人の家族介護者の方々へ感謝致しますとともに、訪問看護実習に関わりのありました要介護高齢者の方々のご冥福をお祈り致します。

文 献

- 1) 佐藤みつ子, 山田京子, 石鍋圭子, 半田幸代, 大下静香 (1996) 在宅介護が介護者に及ぼす影響と看護ニーズ - 脳血管障害者を介護する家族の調査から -, 山梨医大紀要, 13: 23-27
- 2) 木下由美子 (2000) 厚生省大臣官房統計情報部「老人訪問看護・訪問看護報告・寝たきり度ランク」, 在宅看護論, 医歯薬出版: 23
- 3) 緒方正名, 當瀬美枝, 山田寛子 (1997) 在宅ケアにおける介護負担度の検討-社会的・身体的・精神的・経済的視点から-, 川崎医療福祉学会誌, 7 (1) 岡山: 19-32
- 4) 白澤政和 (1996) “ケアマネージャー養成テキストブック”, 中央法規, 東京: 26-31

受付日 2001年1月5日